

# おかしみの生成における言語操作の構造

—漫才を資料として—

関 綾 子

【キーワード】ズレ 転回軸 既成概念 獲得概念 伝達的操作 展開的操作

## 1. はじめに

私たちが洒落を聞いて笑う時、あるいはサイレント映画のスラップスティックを見て笑う時、それは概ね「おかしい」という感情に由来している。しかし、この「おかしい」という感情は、なにか明確なものを指しているのではなく、情報処理の際に参照する自己のコンテキストが、対象のある部分に「おかしい」という感情を伴って反応したことを指している。ゆえに、おかしみは個人的体験であり、おかしみの在り処は千差万別である。さらに、サイレント映画のおかしみを言語学では説明できないように、言語学が言及できる領域も限られている。

本稿では、おかしみが生成される際の重層性を明確にした上で、統一理論への足掛かりとして、哲学や心理学、社会学などの研究分野との棲み分けができるよう、言語学的アプローチの有効領域を定めたい。また、おかしみの誘発因子とされるズレ<sup>\*1</sup>—既存の認識が新たに得た情報と照合された時に遭遇する乖離感—の実態を明らかにし、漫才という話芸における「おかしみ」を惹起する言語表現の技法を探ることで、「人はなにを笑うのか」という課題への接近を試みる。

### 1. 1. 先行研究

漫才の笑いに関しては、1970年代に漫才作家の秋田實や上方言語研究家の前田勇により分類が施されている。しかしいずれも、「洒落」などの技法と「本末転倒」などの事柄、「優越」などの発想が混在する形で示されるものだった。その後、演芸番組の構成作家である織田(1986)により「笑いを起こす人物」「笑いを起こす言動・状況」に分類され、それぞれについて下位分類がなされたが、おかしみが宿るレベルを語るには十分とは言い難い。

また、言語学的研究として、すでに、語用論的視点から協調の原理に対するズレを漫才の笑いに見た金水(1992)、同一の形や意味をもつ語・表現が上位項(正常)から下位項(異常)へと転移する技法としてジョークを分析した小泉(1997)、フレーム理論から落語の笑いを分析したウェルチ・野村(1996)などの先駆的研究があり、ズレのヴァリエーションを示唆してはいるものの、分析理論の枠組み

がズレの性質を限定している点に気づかされる。よって、本稿では語用論・レトリック分析・談話分析などの理論を適宜援用しながら分析を進めることとする。

## 2. 考察の対象と方法

### 2. 1. 資料と分析方法

1997年～98年にテレビ放映された漫才(11組18演目)の文字化テキストを作成し<sup>\*2</sup>、用例抽出の指標を観客の笑い反応<sup>\*3</sup>(780回)に定めた。うち、非言語行動が単独で笑いを喚起している場合や非言語行動に対して言語行動が付随的に用いられている場合(38回/780回=4.9%)は除き、主として言語的要因が笑いを喚起していると思われるもの(742回/780回=95.1%)を分析対象とした。なお、資料は時系列を再現した形であるが、用いた記号・文字は次の通りである。

- ①行頭のアルファベット：演者名の頭文字。同行の発話は、当該演者の発話。
- ②笑い：観客の笑いが、会話のどこで生じたかを表す。反応程度は考慮しない。
- ③~~~~：分析対象となる発話に付す。
- ④\_\_\_\_\_：4. 2.において、展開に関係する発話、おかしみの精度を増す発話に付す。

### 2. 2. 漫才という話芸の性質と制約

二人芸である漫才は、ひとつの大きなオチに向かうことを志向する落語と比べると、小さなオチをとところどころに仕掛け、ふだんに笑いをばらまく話芸である。その笑いは時事的かつ消費的であるため、幾度聞いてもおもしろいというものではない。落語が「他者を演じる」のに対し、漫才は「自分自身のこととしてしゃべる」のであり、疑似雑談に最も近い形の話芸と言えるだろう。

しかし、馴染みのギャグに対する「よろこびの笑い」、他者の笑いにも共振する「つられ笑い」、観客の笑欲充足志向による「過度の笑い」、意図的に挿入された「さくらの笑い」など、「おかしみ」以外の誘因による笑いの存在も否認しない。また、「他人に聞かれることを前提とした会話」である点を考えれば、笑い笑われ笑い合うという日常的現象とは、やはり異なることを付言せねばならない。

## 3. 「おかしみ」分析の言語学的領域

分析の前段階として、「おかしみ」が宿り得る在り処を明確にしたい。その重層的構造を図示したものが図1である。まず、ある出来事や言動が「おかしみ」を伴って理解されるためには、状況や文脈、集団か個人かという「場」の要素が関与する。次に、素材たる「コト」の要素がある。たとえば、「自分」という概念は、話し手の在り方と状況によって使い分けられ「ボク・オレ・ワタクシ」と異なる代名詞で表される。「コト」は、こうした主体的把握が施される以前の客観的事柄「自分」を指す。「コト」に「おかしみ」がア・プリオリに備わっている場合もあり、「バナナの皮に滑って転ぶコト」が好例である。この場合、「ヒト」の要素と

して「紳士」が行為主体であり、その「シグサ」が滑稽であれば、「おかしみ」の精度は増すことになるだろうが、「老いた親がバナナの皮に滑って転んだのを見た子」には、一転して悲劇にすらなり得ることを鑑みれば、「ヒト」の要素の関与も大きい。こうした非言語行動は、「コトバ」の積極的関与がない以上、言語学の領域から外れると思われる。

そこで、「コト」の言語化過程にズレが含まれる言語行動の「おかしみ」を言語学的アプローチの有効領域として定める。たとえば「自分をなにかにたとえるコト」という素材があるとす。この時点では「おかしみ」は含まれていない。それを漫才師の「宮川花子（ヒト）」が、「自己賞賛（ミカタ）」を意図し、「お花の蕾みたいな私（コトバ）」と言え、各要素の相乗効果により「おかしみ」へ昇華する可能性は高い。つまり、「おかしみ」の素因を吸収し、次の要素へ波及させていくリンクの構成要素は、「ヒトが、どのようなミカタをして、どのようなコトバで表すか」となる。

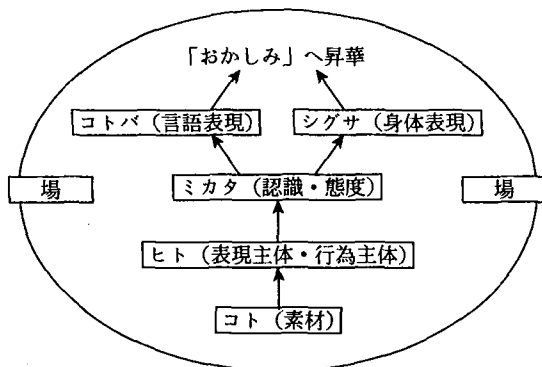


図1 「おかしみ」の重層性と言語学的アプローチの有効領域

#### 4. 「おかしみ」を生成する言語操作

おかしみを生成する言語操作の発現形態を考えるにあたり、中村（1991）のレトリック分析の枠組みを援用し、二種の分析枠を設ける。なお、用例は、出現頻度が高く、「おかしみ」との相性が良いと思われる技法について言及する。

**伝達的操作**：伝達内容の言語化の過程に関わる操作であり、他の発話から受ける拘束力が弱く、比較的独立したひとつの言語表現が笑いを喚起する。よって、ズレを認知したとき、「かくあるべき」という項目の基準は先行発話ではなく、理解主体の知識内にある。「雨ニモ負ケテ 風ニモ負ケテ（中略）ソウイウモノニワタシハナリソウダ\*4」という表現に接し、原作「雨ニモ負ケズ 風ニモ負ケズ（中略）ソウイウモノニワタシハナリタイ」が参照されるものが、これに当たる。

**展開的操作**：会話展開やことばの配列が笑いを喚起し増幅させる。参照される項目の基準は知識のみならず、先行発話にも配置され、「日本において幸せになる三つの条件は、義理と人情とお中元」のように、第三のことば「お中元」の落差を鮮明にするために、「義理と人情」を先行配置するものなどが挙げられる。

#### 4. 1. 伝達的操作

あるものが別のあるものへズレたという認知は、常識・規則・推論など、経験的に蓄積された知識の総体（既成概念）と新しく得たもの（獲得概念）との照合により生じる。既成概念は、ある関連性・類似性（転回軸<sup>\*5</sup>）を契機に、獲得概念へと変貌する可能性を有している。たとえば、「案ずるより生むが易し（既成概念）」を「音」転回軸に沿って回転させると「杏より梅が安し（獲得概念）」が現われる。両者が転回軸を挟んで向き合う面が類似する「音」であり、その裏面の別方向を向く面が「意味」、すなわち「ズレ」である。伝達的操作は転回軸の性質で二相に分かれる。

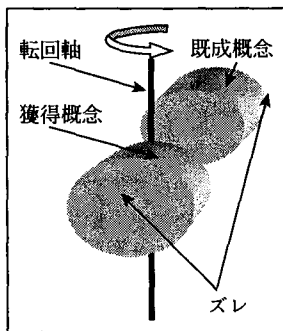


図2 ズレ生成のモデル

##### 4. 1. 1. 表現内容と伝達内容がほぼ重なる相（表現内容≒伝達内容）

第一の相は、真意を汲み取ることによっておかしみが生ずる類の間接表現によらず、音・語・意味・文法などのレベルで転回軸が起動して、隠れた関連性を発見させるものである。他の相と比べると理解が容易で、ズレの交錯も少ない。

[例1] 《高校時代に、Sは陸上部だったという話題》

66

S：俺なんか、100メートルを7秒で走ったら、フラットとする。7秒フラット。

笑い

【セントルイス①】

「フラット」という音を基軸に転回させた結果、意味のズレが生じた洒落の技法である。本来の意味「ちょうど」に対し、ズレた意味が情報価値の低い、ばかばかしいものであるだけに、そのギャップがおかしみを生んでいる。

また、語用論においてしばしば引用されるものに Grice (1975) の「協調の原理 (cooperative principle)」があるが、本例は発話態度において、真実を述べるべしとする「質の公理」に違反しており、言語表現以前の表現主体の会話の場に対するミカタ（認識・態度）においてもズレがあると言えよう。「協調の原理」は、

会話が円滑に進むために望ましいとされる条件であり、基本原則から導かれる4つの公理がある。以下にその概要を筆者のことばに直して引用する。

- ①質の公理 (the maxim of quality) : 根拠のある本当のことだけを述べよ。
- ②量の公理 (the maxim of quantity) : 過不足ない情報を述べよ。
- ③関係の公理 (the maxim of relation) : その場に関連したことを述べよ。
- ④方法の公理 (the maxim of manner) : 明確、簡潔に、順序立てて述べよ。

[例2] 《舞台登場の挨拶》

4

H : まー、世界の花のなかでも一番美しい！ 宮川花子がやって参りました。

笑い

【宮川②】

リーチ (1983) は自分の美点を控えめに言うのは「丁寧性の原理」が働くゆえである、という指摘を行っている。この根本原理からは、気配り・寛大性・是認・謙遜・含意・共感の原則が導かれ、いずれも他者と自己の処遇を述べている。たとえば「ご趣味は？」と聞かれ「茶道を少々」と答えるのは、明確に話すことが望ましいとする「方法の公理」に一見違反しているわけだが、これは「自己賞賛を最小限に」という謙遜の原則に従ったためである、と説明できるのである。

本例は、この原理に違反し、正面から自己賞賛しているのが第一のズレであり、宮川花子の「花」と植物の「花」という語の同一性のもとに、因循な態度の夫Dに対して、常に独断専行する趣意のイメージを、媒体の顕著なイメージに仮託して、優しさや繊細さへと反転させているのが第二のズレである。

[例3] 《Hが自分の出産を回想し、お腹のなかの子どもとの会話を再現する》

64

H : お母ちゃん、次がんばる。おかん、がんばってる、いつでもええぞ。ほな

65

H : レディーゴーじゃ、よし行くで。

D : 言わへん。大阪人の子が「レディーゴー」て。

笑い

【宮川①】

「レディーゴー」を大阪弁に翻訳すれば、おそらく「よし行くで」になるであろう。意味という転回軸のもとに、大阪弁から英語へと転回させ、それを大阪弁の地の文に紛れ込ませ、「レディーゴーじゃ」と無理矢理な接合を行う。胎内で出生

待機中の、ことばをもたないはずの赤子が英語を話すところに飛躍がある。

[例4] 〈N に最近の不景気の原因を聞かれて〉

17

N: わかるかって言うの。 そうだよ。

K: はあはあはあ。 あ、原因か。 あ、そりゃ、やっぱ

18

K: り、あれだろうな。 消費税の値上げによるね、えー、地球の温暖化かな。

笑い

【昭和①】

「消費税の値上げ」と「地球の温暖化」は、時事問題というジャンルにおいて共通性を有しているが、因果関係は存在しない。結びつかないもの同士を結合させるという文法形式上の違反とともに、半可通をふりまわしたために、無関係の帰結が導かれている点で、「関係の公理」に対するズレも認められる。

[例5] 〈H が自分の出産シーンを回想し、出産経験のある妊婦の話をする〉

41

H: そんな四人、五人産んだお母さん、はよ[早]、ま、あとから来て、ま、すん

42

H: ません。ポンッ、出ました。さよなら。

D:

早いな。

笑い

【宮川④】

お産が大変なのは、初産であるのは一般常識である。とすれば、すでに四、五人出産した妊婦の出産は手慣れたものかもしれないが、ギリギリにやって来て、「ポンッ」と産んで、スタスタ歩いて帰れるほどとは思えない。事実を拡大解釈し、表現に誇張を施すことで、日常的なことがらが非日常へと転移している。

ここまでの考察をまとめると、表1のように整理される。

表1 「表現内容≠伝達内容」におけるズレ生成の要素

例	転回軸	既存概念	獲得概念	ズレ
1	発話態度	真実	虚偽	質の公理
	音	7秒ちょうど	7秒で走ったら、フラットとする	意味
2	発話態度	自己賞賛は最小限に	自己賞賛	丁寧性の原理
	語	花子は美しくない	花子は美しい	イメージ
3	発話態度	真実	虚偽	質の公理
	意味	よし行くで	レディーゴーじゃ	語種
4	発話態度	関連性遵守	関連性無視	関係の公理
	ジャンル	消費税の値上げによる(消費者の買い渋り)	消費税の値上げによる地球の温暖化	文法
5	発話態度	真実	虚偽	質の公理
	事実	出産経験の多い妊婦は安産である。	ボンッ、出ました。さよなら。	表現

4. 1. 2. 表現内容と伝達内容が重ならない相 (表現内容≠伝達内容)

第二の相は、表現形式を転回軸に、表現内容(文字通りの意味)と伝達内容(言外の意味)にズレを生じさせる点で、第一の相と異なる。激しい口論の末に「あなたって本当にご立派」と言えば字面は賞賛だが、真意は皮肉となる。これが笑いに結びつくためには、笑いの場が保証されていることはもちろん、理解主体側に語彙や文法知識のみならず、言語生活に対する知識が必要とされる。

[例6] 《妻帯者のHが、独身のTに風呂もゆっくりつかれないと愚痴をこぼす》

71

H: あんたなんかええよ。風呂入りとうたら、ゆだるまでつかとつたらええか

72

T: ポロポロや。 変わってえな。

H: ら。 幸せやんか。 ほんまやでえ。

笑い

【横山】

「湯で煮られて火が通る」を意味する「ゆだる」は、人間に用いる語ではない。「風呂の湯で体が十分に温まるまでつかれる」は好ましいが、「ゆだるまでつかれる」は、「死んでも誰にも気づかれない」という孤独を含意する。「温まる」「ゆだる」は、双方とも「湯」を手段とするが、「ゆだる」の主体に使用制限があり、手段によってもたらされる結果が異なるために、文法的な違和感がある。しかし、

その違和感は、「幸せやんか」という羨望の表現内容を隠れ蓑にした、悪辣な嘲笑を含めた伝達内容を理解することによって解消される。

表2 「表現内容≠伝達内容」におけるズレ生成の要素

例	転回軸	既成概念	獲得概念	ズレ
6	発話態度	他者非難は最小限に	他者非難	丁寧性の原理
	意味	体が十分温まるまで	ゆるるまで	文法
	表現内容	羨望	嘲笑	伝達内容

#### 4. 2. 展開的操作

次に、言語表現相互の関係の在り方が「おかしみ」を喚起する操作に移る。伝達操作と異なるのは、文脈の設定により働く理解主体の推論が要となる点である。二者間の会話の運びが常識的な展開からズレているものと、伝達操作を内包しつつ、配列の妙を利用して、おかしみの精度を増すものの二種の相がある。

##### 4. 2. 1. 展開そのものがおかしみとなる相（展開＝おかしみ）

質問には返答、挨拶には挨拶を返す。会話への割り込みや、発話権利の横取りは好ましくない。こうした会話運営規則を標的に定めてズレの転回軸とし、笑いに貢献する展開がある。参加者相互の働きかけによって成り立つやりとりには破綻をきたすこの操作は、演者のキャラクターや漫才のスタイルと関係が深く、伝達内容を表現する際にレトリカルな言語操作を施すことまでの例とは異なる。展開そのものがおかしみをもっており、談話分析理論を援用することが有効である。

[例7] 《不景気の原因について、NがKにたずねる》

20

N: なんで不景気になったか、わかるか?

K: ああ、そうだそうだ。そりゃそうだな。

笑い

【昭和①】

Kは無批判的で過度に相手に共感する人物である。習慣化した惰性が情報要求されてさえもなお、ひたすらな相槌を打つという違反を犯させている。丁寧性の原理の「共感の原理」を遵守した結果、関係の公理が反故にされた例である。

[例8] 《多弁と思われるのは心外と、HがDに挨拶を促す》

12

H: うちの主人である大助にひとこと、ひとこと、言わさして、新年の挨拶。



H: ま、彼もこないに言うてはりますが。

D: はい、あのう、 ないにも言うてへん。

笑い

【宮川①】

イントネーションや発話内容は、発話権利移行を知らせるサインである。それを待たずして横取りし、発話権利を占有するところに力関係が画然と現れる。

表3 「展開=おかしみ」におけるズレ生成の要素

例	転回軸	既成概念	獲得概念	ズレ
7	発話態度	関連性遵守	関連性無視	関係の公理
	会話	情報要求 ←情報提供	情報要求 ←同意表明	隣接ペア
8	発話態度	他者の発言に気配りせよ	他者の発言への気配りの欠如	丁寧性の原理
	会話	発話権利 (D)	発話権利 (H)	発話権利

#### 4. 2. 2. おかしみの精度を増すために展開が用いられる相 (展開におかしみ)

最後に挙げる相は、言語表現を単独で用いたのでは十分に効果を発揮し得ないが、複数の発話を積み重ね、かかわらせるという配列の工夫により、すでに在る伝達的操作のインパクトを強化し、おかしみの精度を高める操作である。

[例9] 《I は、女子校時代に男子学生に人気があったという話題》

9

K: いくよちゃん目当てにね、よその男子校の生徒が、学校のまわりウロチョロ

10

I: いや、くるよちゃんかて、そうやん。くるよ

K: ウロチョロしてはったんです。 は。

11

I: ちゃん目当てに大相撲の親方衆が、学校のまわりウロウロしてはったがな。

笑い

【今②】

先行するIの情報が、後続するKの情報との対比を引き立てる基準点として機能し、そこからの落差が笑いの精度を増している例である。両者は、「(I・K) 目当てに、(ある男性の集団) が、学校のまわり (ウロチョロ・ウロウロ)」と言語形式において対応している。しかし、その中身を見てみると、一方は「男子高校

生」、他方は「大相撲の親方衆」であり、「恋人」になることを望まれる女子高校生と「関取」になることを望まれる女子高校生との対比が悲哀まじりのおかしみを生む。また、「くるよちゃんかて、そうやん」によって、理解主体は「Kもまた男子高校生にもてた」のだと推論するが、Iは言語形式の対応、つまり「Kを目当てにある男性の集団がウロチョロしていた」点では同じであったことに焦点化しているにすぎないという仕掛けがある。理解主体をある思い込みへと導く発話をあらかじめ配置することで、おかしみの実効力を高めていると言えよう。

[例10] 《Kの妻の話題》

16  
 T: ええ奥さんですよ。 落ち着きがある。 いっぺん  
 K: もう、家庭の話やめよ。 そうか?  
 17  
 T: 座ったら、立とうとせえへん。 ベッターって、茶の一杯も出えへんですわ。

笑い/拍手

【酒井①】

「ええ奥さん」「落ち着きがある」が一瞬の目くらましとなり、「冷静で淑やかな妻」像を理解主体に結ばせたところで、「いっぺん座ったら立とうとせえへん」とTが真に伝えんとした伝達内容を明かし、褒めから貶しへの急降下を成功させている例である。「落ち着きがある」は「ささいな物事に動じない」が辞書的意味で、当然ながら、来客時に働かない妻は例外である、というような記述は辞書にないことを考えれば、こじつけではあるものの、接客をしない妻でさえも「落ち着きがある」と言える余地は残されていることになる。語や表現にイメージや含意が染みついているために、理解主体が常識的推論を働かせるほどに、ある思い込みへと誘い込まれてしまうのだと言えるだろう。

表4 「展開におかしみ」におけるズレ生成の要素

例	転回軸	既成概念	獲得概念	ズレ
9	発話態度	他者非難は最小限に	他者非難	丁寧性の原理
	発話態度	真実	虚偽	質の公理
	事実	Kは太っていた。	相撲部屋に勧誘された。	表現
	表現内容	賞賛	愚弄	伝達内容
10	発話態度	他者非難は最小限に	他者非難	丁寧性の原理
	語	Kの妻は冷静で淑やかである。	Kの妻は、不精者である。	意味
	表現内容	賞賛	愚弄	伝達内容

## 5. まとめ

- (1) 言語表現によって「おかしみ」が喚起されるとき、ズレの転回軸として「発話態度」「音」「語」「意味」「ジャンル」「表現内容」「会話」が関与し、日常言語規則の網状組織を射程にとらえられている。また、分析理論の枠組みを超えれば、複数軸の起動が認められ、おかしみはズレの錯綜体と言える。
- (2) ズレは獲得概念が既成概念と照合された時に生じるが、その実態は情報伝達という狭義のコミュニケーションの場面で、選ばれるべき能率的で望ましい項目（言語の表層）と、それらとなんらかのネットワークでつながってはいるものの、慣用的には非能率的で望ましくない項目（言語の深層）との関係性である。よって、おかしみの言語操作は、カオス（パロール）によって日常言語のコスモス（ラング）に気づきを与える働きを有すると言える。
- (3) 言語表現のおかしみは、語・文法を理解し、推論し、整合的文脈を構築していく知的営みを有しているからこそ可能になる。ここになぜ、おかしみの笑いが人間固有の表情であり、なぜ、おかしみの体験が文化共有を確認する行為や、異文化排除にもなり得るのかを説明する解のひとつがあると言える。
- (4) 意外性との遭遇－ズレの知覚－は、驚きや恐怖にも共通の体験である。笑い・驚き・恐怖に共通のズレが、それぞれの感覚に分化していく処理過程の解明には、おそらく、心理学等の研究分野との連携が必要であろう。よって、ズレは、おかしみの笑いにとって必要条件ではあるが、十分条件ではないという根源的な課題が残されていることを確認し、本稿を終わることとする。

---

※1 「笑いが生じるのはいつでもある概念と、なんらかの点でこの概念を通じて考えられている実在の対象との間に、突然ズレが知覚されるためにほかならず、笑いそのものがまさにこのズレの表現なのである」(ショーペンハウエル, 1975, P192) に端的に表現され、ケストラーなどにより継承された。なお「ズレ」は訳者によって「不一致」と訳出される書もある。

※2 選定基準として、音曲によらないシャベクリ漫才に限定し、地域性では東京4組7演目、上方7組11演目、コンビの組み合わせは夫婦1組、兄弟1組、他人9組、「漫才として認知されているもの」を対象とするため中堅・ベテラン層の漫才をとりあげた。

※3 「おかしみ」は、「笑い声」を常に伴う感情というわけではないという問題もある。

※4 堀田善衛『広場の孤独』より引用。

※5 Hockett (1972) による名づけで、原語は[PIVOT]。ジョークの核となり、解釈のすりかえを行う語や文を意味する。本稿では「ズレを生む基軸」という意味で用いる。

## 【参考・引用文献】

秋田實 (1972) 『笑いの創造』 / 日本実業出版社

- ウェルチ, P.・野村雅昭 (1996)「落語「長屋の花見」のユーモアとフレーム分析」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』8 / 早稲田大学日本語研究教育センター
- 織田正吉 (1986)『笑いとユーモア』 / 筑摩書房
- 金水敏 (1992)「ボケとツッコミー語用論による漫才の会話の分析ー」『上方の文化 上方ことばの今昔』 / 和泉書院
- ケストラー, A. (1983)『ホロン革命』 / 田中三彦・吉岡佳子訳 / 東京工作舎
- 小泉保 (1997)『ジョークとレトリックの語用論』 / 大修館書店
- ザトラウスキー, P. (1993)『日本語の談話の構造分析』 / くろしお出版
- ショーペンハウエル, A. (1975 (1819))『意志と表象としての世界』 / 西尾幹二訳 / 中央公論社
- スペルベル, D.・ウィルソン, D. (1993)『関連性理論ー伝達と認知』 / 内田聖二 ほか訳 / 研究社出版
- 中村明 (1991)『日本語レトリックの体系』岩波書店
- パニョル, M. (1953)『笑いについて』 / 鈴木力衛訳 / 岩波新書
- フロイト, S. (1970 (1905))「機知ーその無意識との関係ー」『フロイト著作集 4』 / 懸田克躬ほか訳 / 人文書院
- ベルグソン, H. (1997 (1938))『笑い』 / 林達夫訳 / 岩波文庫
- 前田勇 (1975)『上方まんざい 八百年史』 / 杉本書店
- リーチ, G. (1987 (1983))『語用論』 / 池上嘉彦・川上誓作訳 / 紀伊國屋書店
- Grice, H. P. (1975) "Logic and Conversation", *Syntax and semantics*. Vol. 3 in Cole and Morgan (eds.)
- Hockett, C. F. (1972) "Jokes" Smith, M. E. (ed) *Studies in Linguistics in Honor of George L. Trager*. The Hague : Mouton.

【用例・資料】用例のみ放映番組・日時を挙げ、その他の資料はコンビ名のみを記す。

- 【今いくよくるよ②】 〈初笑い東京寄席 / 1998. 1. 3. NTV〉
- 【酒井くにおとおる①】 〈初笑い東京寄席 / 1998. 1. 3. NTV〉
- 【昭和のいるこいる①】 〈初笑い東京寄席 / 1998. 1. 3. NTV〉
- 【セントルイス①】 〈ザッツ・演芸テイメント / 1998. 4. 8. CX〉
- 【宮川大助花子①】 〈初笑い東京寄席 / 1998. 1. 3. NTV〉
- 【宮川大助花子②】 〈土曜特集 漫才デラックス / 1998. 1. 24. NHK〉
- 【横山たかしひろし】 〈初笑い東京寄席 / 1998. 1. 3. NTV〉
- 【青空球児好児①②】 【今いくよくるよ①】 【大木こだまひびき①②】 【おぼんこぼん】
- 【酒井くにおとおる②】 【昭和のいるこいる②】 【セントルイス②】
- 【西方のりお上方よしお】 【はな寛太いま寛大】

#### 【付記】

本稿は、修士論文『おかしみの構造に関する一試論』(1999年3月)の一部を早稲田大学国語学会(2001年7月)にて発表し、修正・加筆を施したものである。ご指導くださった先生方や諸先輩に心より感謝申し上げます。